



(消去+強化)ⁿ+反応プロンプトの例

本号までの4回は、第30号で紹介した新潟大学 有川宏幸先生の著書「教室の中の応用行動分析学」を参考にしながら書いています。区切りの回となる今回は、この本に記されているエピソードを一つ紹介します（スペースの都合上、簡潔にまとめてあります）。

登場するのは、思い通りにならないことがあると、手当たり次第に物を投げつけるなどの行動が見られる子。授業中、その子が「センセエ、コレ、ワカンナイヨ」（原文のママ）と叫ぶと、机間巡視をしていた教師は、「どこがわからないの？」と子どものところに向かいます。授業中にタメ口で先生を呼ぶのですが、分からないから教えて欲しいのです。

このときの**行動**は「センセエ、コレ、ワカンナイヨと叫ぶ」、行動の**直前の出来事**は「解答できない問題が目の前にある」、**直後の出来事**は「教師が、どこがわからないの？と言いながら近づく」です。この行動は繰り返されているので、直後の対応によって**強化**されています。

ある日の国語「敬語」の授業、教師が説明します。「敬語には丁寧語というものがあります。『です』とか『ます』を付けます。他にもみんな、よく言うでしょ。授業中『ワカンナイ』って。これを丁寧に言うとワカリマ…？」子どもたちが反応します。「あっ、わかった『ワカリマセン』だ。」「そう！『わかりません』と言います。」教師はしっかりと教えていますが…。

先ほどの子。今なお「センセエ～、コレ、ワカンナイヨ」。ところが今回、教師は応じずに机間指導を続けます。「センセエ、ネエ、センセエ！ ワカンナイヨオ、コレエ」。前より大きな声になり、これは嫌な予感…。教師は**消去**の手続きに入ったのです。少しして不思議なことが起こります。「ネエ、センセ、コレ、ワカンナイデス」。するとどうでしょう。教師は、さっきとは打って変わって子どもの元に駆けつけ、「どこがわからないの？」と。その後も敬語が出れば駆けつける…を繰り返すと（**強化**）、徐々に「～デス」の使用頻度は増していきます。

ところがその後、教師は再び応じなくなります（**消去**）。しかし、今度は子どもが「センセイ、ワカラナイデス」と言った瞬間、「どこがわからないの？」と駆けつけます（**強化**）。また少し正しく敬語を使う姿に近付きました。



この「ワカラナイデス」が安定した頃、教師は再度**消去**の手続きを行います。「センセエ、ワカラナイデス…ネエ、センセエ、ネエ、センセエ…ワカラナイデス、コレエ」さっきより大きな声で。このままでは教科書「バン！」に…。そのとき、教師はこの子に向かって囁くような小さな声で「ワカリマ…」、次の瞬間、「セン！ あっ、えっと、じゃなくて…ワカリマセンだ」「そうです！ で、どこがわからないの？」（**強化**）

もうおわかりだと思いますが、この教師は、**消去と強化の手続きをくり返し用いて、目指す行動に段階的に近づけています**。前号で記しましたが、消去の手続きで「行動」はすぐには消失しません。大抵はしばらくの間、その「行動」は逆に増加します。この場合もそうです。もし、この段階で教師が「静かにしなさい。」「正しく言えない人の話は聞きません。」などと言いつつ放ったらかしにしたら、あるいは、子どもが痺れを切らして机を「バン！」、その直後に教師が「どこがわからないの？」と駆けつけたとしたら、どうなっていたでしょうか。

もう一つは、爆発(行動)の**直前**の絶妙なタイミングで与えたヒントの効果です。これを「**反応プロンプト**」と言います（日常的によく用いられている手法です）。反応プロンプトは影響力が大きく、これを期待して依存的になりやすいため、あくまで弱く・短く・控え目に与え、できるだけ速やかにやめることを意識しながら用いるようにします。

担当 学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）
TEL 639-4392